全国初！「平成の公会堂」と屋根付き広場、市庁舎が一体に集い、語らい、楽しむ交流の広場

大西　隆さん
東京大学先端科学技術研究センター教授
研究分野は大都市圏の成長管理、安定成長下での大都市圏計画制度のあり方など。昭和56年４月から約７年間、長岡技術科学大学に勤務。長岡地域商業近代化実施計画の策定委員など、長岡の将来計画に関わる。

川口とし子さん
建築家／日本大学理工学部、長岡造形大学 非常勤講師
㈲アーキスタジオ川口代表取締役。建築活動のほか、インテリア・家具・プロダクトのデザインを手掛ける。民放で人気のリフォーム番組に『匠』として登場。

西村伸也さん
新潟大学工学部副学部長、建設学科教授
研究分野は建築計画・都市計画、建築史・意匠。平成９年から、栃尾表町の住民と行政と協働で雁木を生かしたまちづくりに携わっている。

コストを抑え、軽い負担で新しい価値を生み出す！

森　民夫
長岡市長

市長●中越大震災の時、市役所は機能が停止しましてね。停電もしたし、水漏れもあった。四時間くらい使えなくて、消防本部を災害対策本部にしました。大きな余震が続いたこともあり、鉄筋のひび割れなど目に見えない問題を抱えています。現在の耐震性は、基準のわずか六割しかありません。

市役所は災害時、対策本部としての機能を担います。このためにも早く直さなければと思いました。

もともと、合併などにより庁舎のスペース不足という問題がありました。

そこで、今の庁舎を耐震補強するとともにスペース確保のため幸町に新たに庁舎を造る場合と、中心市街地に造る場合とでコストを比較しました。すると、中心市街地の方が十億円負担が少なく三十五億円だったんですね。

それなら庁舎の新設だけでなく、これからはコンパクトシティの時代。交通弱者対策もあるし、市民協働型市役所という意味合いも含めて、新たな価値を創造できる中心市街地が良いと判断しました。

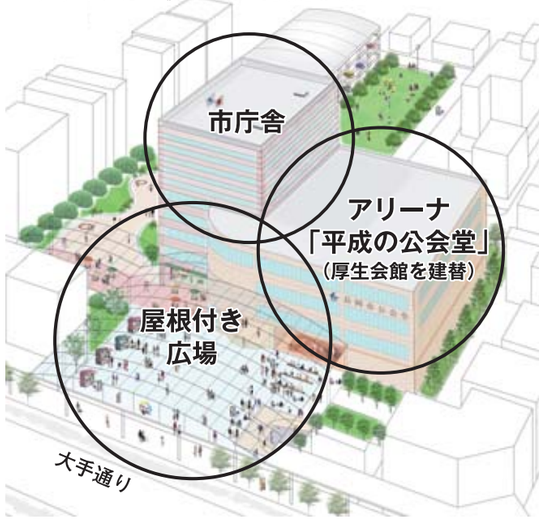
西村●新潟県は、コンパクトシティという概念に基づいて各都市を再生しようとしています。これは、中心に一つの大きな核があって、周辺の地域の核とネットワークで結ばれるという図式です。

こうしたコンパクトシティでは、一番アクセスしやすい場所は公共交通機関が放射状に集まる中心核。そこに市の中枢機能を置くことは、この考え方からも合理的です。

大西●「長岡的コンパクトシティをどうつくるか」というのはいろんな議論が必要ですが、それぞれの地域で、便利な生活ができなければいけない。中心市街地については、相当てこ入れをしないといけない状況にあります。これから数十年かけてここを立て直すというのは大事なことだと思います。

〈厚生会館地区のイメージ図〉

屋根付き広場、多目的アリーナのある「平成の公会堂」、市庁舎が一体となった空間になります。
※図にある建物のデザインはあくまでイメージです。
　デザインは今後コンペで決定します。



バスに頼るお年寄りのために

川口●中心市街地に市役所機能が動いてくるというのは、非常にありがたい話です。

日本の抱える一番大きな問題は、高齢化社会ですよね。私は造形大学に週に一、二度行きますが、長岡駅からバスで通っています。車内は、病院まで行くお年寄りでいっぱい。バスに頼っているんですね。

市長●そうですね。お年寄りで免許を持っていない人が、唯一集まれる場所、それが中心市街地だと思います。

一方で、大多数が車の利用者な

ので、駐車場など不便にならないようにという意見もあります。中心市街地に駐車場を造った場合、立体式になります。確かに、郊外の平面駐車場に比べれば不便かもしれない。しかし、市長としては「障害を持った人とかお年寄りが便利になるのだから、その分我慢してください」と、市民のみなさんの協力をお願いしたい。

職員のものじゃない市役所、市民の市役所を新たにつくる

西村●中心市街地に市役所を置くとき、もう一つ重要なことは「市民のもの」というイメージを強くできるかです。職員のための執務スペースというイメージを「市役所」という言葉は伝えます。市民は「なんでそんなものに税金を使い、さらに中心市街地のためだけに持ってこなければいけないんだ」と思いますから。

市長●そこなんです。市民からすると証明書を取りに行くしか用事がなくて、あとは職員の執務室だと思っている。そこが問題ですね。

西村●市役所という概念を壊して、市民と協働できる今までと違った機能を持った場所にする。中心市街地に「戻す」のではなく、「新たにつくる」という視点じゃないといけない。

市長●今の市役所には、建設当時の小林孝平市長の思いがありました。「市役所」という名前はいやだから英語の「シティホール」にしようとか、「市民広場」にしようとか。一階の入り口を広くし、二階まで吹き抜けにして、コンサートや展覧会などイベントをしようという意図があったんです。市民と一体の市役所を目指したわけですね。ところが場所が悪かったせいもあって、残念ながら使われていません。

フリマや大道芸から式典までなんでもありの祝祭空間

大西●そのとき、職員全員が入らなくていいから拠点を一つ、市役所らしいところは造っておかないと芯がなくなってしまう気がします。

市長●現に、市役所で行うセレモニーの数は多いですよ。例えば、インターハイに出場するバレーボールチームの激励会とか、交通安全の出発式とか。本当は市役所前の広場を使って、みんなで応援するという形にしたい。フリーマーケットも面白い。でも、今の場所は人がいなくて。象徴としての場は市民に愛してもらわないといけない中心です。

合併で、日本海まで広がった長岡市は、いろんなところに拠点があるので、一カ所だけに都市機能が集まるまちの設計はできないと思います。でも、最大の拠点が中心市街地であることは間違いない。やはり中心性を高めないとまちらしくない。そういう意味で市役所という役割は重要です。その上でさまざまな機能がネットワーク化していて、仕事上もうまく動いているという広い意味でのテレワークが実現されているというのも、新しいタイプの市役所の方向です。

市長●世界には、市の中心部に市役所が分散している事例は結構あります。上海は、市庁舎がまちの真ん中にあって、面積が狭いため、まちの各所に出しています。そんなイメージを持っています。

西村●つまり、市役所の機能としては日々変化するわけで、稼働できる部分を借りながら必要な面積を確保する。それが密接に関係しなくても、大西先生のおっしゃったテレワーク、通信でつながっていれば機能を分散できますよね。

分散する意味は、市役所の「人」が中心市街地に散らばっていて、街の中に出て行く機会を持てるということ。オフィスの中に閉じこもって仕事をしているだけではなく、街がどう動いていて、どういう人たちがどういう活動をしているかという情報を、移動のたびに自分の中に蓄えていく。とてもいい機会になると思うんですね。

職員が街の中に出て情報を

大西●シティホールという考え方は、ヨーロッパの伝統です。まちの中心に市役所や議場、広場があり、そこに市場が出る。まさにまちのに、職員の仕事スペースとしか思われていないのはわれわれの努力が足りないのかなと思いますね。

西村●でも、震災で市役所の人たちが現地に出て行って働いた。ずいぶん街の人との距離が近くなったと思いますよ。

市長●仕事をしている姿が市民に見えたということでしょうか。災害対策本部の会議を生中継したのですが、私が部課長をしかるといった生の現場が見えて、よかったようです。どういう仕事をどういう風にやっているのかが見えるということは、すごく大事だと思いましたね。

西村●逆に、市民が市役所に近づくことも考えられます。例えば、NPO法人が市役所の中にスペースを持って、そこで活動できるようになるといいと思います。

大西●せっかく中心市街地に来るんだから、市役所が休みの土・日に昔の商店街の銀行みたいに閑散となってはいけない。イベントや市場を開き、三百六十五日使われている感じがでるといい。

市長●ハレの場として、雨が降っても使える広場があって、今の厚生会館の機能を持った多目的アリーナがあって、その横に市役所のホールがある。その三つをどう有機的に連携させるかという設計は、面白いテーマだと思います。

広場は何をやってもいいような使われ方で、アリーナはプロバスケの試合やダンスの会とかいろんな催し物を。市役所のホールでは、美術の展覧会や音楽会を開く。そんなイメージを描いているんです。

歩いているだけで楽しいまち

西村●街を歩いて楽しめるような状況が、市役所を中心市街地に移転した先にできると、活性化するだけではなくて、生活する人たちがより豊かになっていくし、定住してみようという人も増えてくる。そういう転機になるといい。

大西●そのためにも、商店街の活性化や中心市街地の使い方、そこに住む人の生活、駅を中心とした動き、そういうものをもう一回点検し、将来像を描くことが必要です。市役所をどうするか眺めているのではなく、自分たちで何か企画するという動きが出てきてほしい。

川口●建築家から見て、市の機能、

多目的ホール、屋根付き広場は非常に面白い。銀行なども人がいらなくなるでしょうし、建築そのものあり方が変わってきますね。

物産の販売やイベントの開催 広い圏域巻き込む波及効果も

西村●合併した市町村も含めて考えていく必要もあります。各地域には支所があって、市役所機能が補完されているのでことが足りている。だから、まあいいやということになるかもしれないが、交通のアクセスを含めて、どう機能分担させて運営していくか考えないと。

市長●そうなんです。機能だけを見ると、市役所と合併地域の市民の結びつきがなくなってしまう。市役所というか、シティホールがハレの場としての魅力にあふれ、用事がなくても行きたい場所にならないといけない、ということですね。

西村●広い圏域を巻き込むような活動が、中心市街地を中心にわきあがる仕組みが大事ですね。

大西●私の研究室の隣にはカフェがある。コンビニやレストランも。土・日に行くと人が遊びに来てるんですね。そして帰りには大学グッズを買っていく。市役所が長岡市を売り出す一番の中心とすれば、そこで特産品を売ったり、食べられたりする。駅が近いので観光客が寄れるわけだから、そういう機能を付け加えられるといいですね。

市長●栃尾のあぶらげとか、和島のおこわ団子の物産販売。中之島のよさこいソーランのイベント会場として使ってもらうとか。

大西●そういうことを勘定に入れると、三十五億円は安い。活性化して波及効果があるという構想が描けるといい。

そういう流れの中で、いかに人を引き寄せるまちづくりをしていくか。市役所機能以外の都市計画が重要になってくると思います。

じっくり市民の声を、きっとワクワクするアイデアが

市長●土・日の駐車場の使い方も楽しみにしているんですよ。その辺のイメージをつくって、楽しい、面白い使い方を市民に募集すれば、いろいろなアイデアが出てくると思うんです。コンペから実施設計まで一年くらいあるのでじっくり聞いてみたい。ワクワクしますね。

従来のイメージの市役所ではなく、物産販売とかイベントとか、市民がいろんな企画をやる、そんな一体となった空間構成にしたい。それを全国の知恵を集めてコンペかなにかできちんと表現していきたいと思います。

川口●日本はまだまだ東京との関係で都市を考えないといけない。だけど、一時間半で来られる長岡は、非常にアクセスしやすく、それでいて地方に直結している。農業や工業を考えたときに、非常に魅力のある要素を持っているわけです。

長岡の中心市街地を、市役所機能を分散させるという方向性で変えていくという切り口は、非常に可能性があると思います。

大西●確かに市役所が移転する例はあるが、中心にくるというのは画期的。そこにいろんな機能を付け加えて新しい時代の市役所のあり方を提案する。今までそこまでやった市役所はないでしょう。

西村●せっかくやるんだったら、日本で初めてという市役所の姿というものをぜひ。

市長●とにかく、全国初の提案をしたい。市役所、そして中心市街地そのものを変えていく覚悟です。

◎市政懇談会を開催します

各地域の課題への取り組みや、中心市街地への市役所移転について、基本的な考え方を市長が説明します。

直接会場へどうぞ。

期日と会場＝2月11日(日)…厚生会館中ホール、13日(火)…大島コミュニティセンター　時間＝いずれも午後7時～8時30分　問行政管理課☎39・2208

市長に聞く！ ここが分からん、市役所移転論議

――夕張の例があります。長岡は本当に大丈夫？

市長　心配ありません。大丈夫です。

災害や合併前から行財政改善に取り組んだ成果が出ました。災害復旧も順調に進んでいます。これからは災害を乗り越え、積極的に打って出る時期です。

――なぜ今、市役所の移転なのですか。

市長　耐震性に問題があり、スペースも不足しているからです。

今の本庁舎は、外見は丈夫そうですが、実は防災の拠点として必要な耐震性の6割しか満たしていません。30年前の事務量を前提とした設計なので、合併で事務範囲の広がった今、スペース不足も深刻です。また、車を運転しない人にとって利用しづらい立地であるなど、さまざまな問題点が浮き彫りになっています。

――移転先が中心市街地である理由は？

市長　いちばんお金がかからないからです。

移転先の候補は、長岡操車場跡地、中心市街地、現本庁舎のある幸町の3つでした。候補を絞るにあたって考えたのは、私たちの子や孫の世代に負担を残さないこと。比べてみると、中心市街地に移転する場合、通常は出ない国の補助金を受けることができ、市民負担が最小になります。また、市役所に多目的ホールや屋根付き広場を併設することで人が集まり、まちの活性化につながるという効果もあります。

――幸町の今の本庁舎は壊してしまうのですか？

市長　壊さずに有効活用します。

今の本庁舎は、耐震補強を施し、中央公民館を中心に市民が自由に使える活動の場として、有効活用を考えています。壊してしまうわけではありません。

――中心市街地にどんな市役所をつくるのですか。

市長　用事がなくても、みんながぶらりと立ち寄れる場所です。

市役所に隣接して広場やホールがある。そこでは常に何か楽しいイベントをやっていて、用事がなくても思わずぶらりと立ち寄ってしまう。そんなまちのにぎわいの発信地でありたいと考えています。

新しい長岡のまちづくりには、市民と市役所がともに考え、ともに取り組むことが必要。これこそが「市民との協働」です。その拠点として、大勢の市民が集まる場所に、市民と市役所との垣根をなくした、新しいスタイルの市役所をつくります。